

ソマリアの首都モガディシュでの一泊

官房総務課長 金 杉 憲 治

昨今、ソマリアと言えば、同国を拠点とする海賊がアデン湾を中心に跳梁跋扈し、日本も含めた多くの国がそれぞれの艦船を派遣することで海賊問題への対処に努めていることが話題となっている。しかし、1990年代前半には違った意味でソマリアが話題となり、そこに私も些か関与することとなったので、当時を思い出しつつ事実関係を記したい。

1992年12月、私がアフリカ第二課の首席事務官であった当時、ソマリアに対する人道支援のあり方を検討するため、野上義二中近東アフリカ局審議官（当時、現日本国際問題研究所理事長）を団長とする調査団に参加した。1992年3月に北米第一課からアフリカ第二課に異動したのだが、その際、山口壽男課長（当時、現ノールウェー大使）からの指示の第一は、翌年に開催を予定していたアフリカ開発会議（TICAD）を成功に導くことであった。今でこそ TICAD といえば日本の内外で立派に認知されるようになったが、1992年3月の時点では未だ星雲状態で、予算も確保できていないし、また、どのようなコンセプトの会議にするのかも全く決まっていな手探りの状態であった。

山口課長からの指示の第二は、アフリカは色々な意味合いでの「危機」があり得るので、ともかくアンテナを高くしておくようにということであった。そして、ソマリアはその時点で既に人道上の危機を迎えていた。ご承知のように、ソマリアはアフリカ大陸北東部の「アフリカの角」と呼ばれる地域に存在し、19世紀に入るとヨーロッパの列強がこの地域に進出。ソマリアの北部はイギリスに、南部はイタリアの支配下に置かれるようになった。1960年にソマリアとして正式に独立したが、政情は安定せず、また、度重なる旱魃によって深刻な食糧不足を繰り返していた。国内でも部族間の争いが続き、1991年1月には軍事政権が崩壊、ソマリアは無政府状態に陥った。その結果、ソマリア国内には多くの国内避難民が発生し、また、隣国のケニアやエチオピアにも大量の難民が流出したが、その多くが悲惨な飢餓状態に直面していた。アフリカの問題は、こうした悲惨な状況が多くで国で見られるが故に国際社会の注目を浴びないことにあるが、ソマリアについてはエジプト出身のガリ国連事務総長（当時）が旧ユーゴスラビアとの比較においてソマリアに強い関心を示したことから、世界の注目を浴びることになった。

国際社会もこうした状況を放置はせず、1992年になってアメリカを中心とする多国籍軍がソマリアに派遣されたが奏功せず、最終的には1995年に撤退することとなった。その間の1993年には、2001年に映画化されて話題を呼んだ「ブラックホークダウン」、即ち、アメリカの持株部隊の戦闘ヘリコプターであるブラックホークがソマリアの民兵組織に撃墜され、墜落したヘリコプターの乗務員が民兵に殺害され、その遺体が引きずり回されるシーンがCNNで世界中に配信された事件も発生した。

1992年春の時点で外務省内でも「ソマリア支援に如何なる貢献が出来るか」が盛んに議論され、1992年夏までには2,700万ドルの人道支援と国連ソマリア信託基金に対する1億ドルの支出が決定されていた。

しかし、こうした資金協力だけでなく、目に見える貢献の一環として「日本ももっと汗を流すべきである」

との焦燥感にも似た意見が外務省内には強かった。当時の外務省は「湾岸危機後遺症」とでも言うべき雰囲気があり、北米第一課で湾岸危機の物資協力や資金協力を担当していた私個人にとっても、ソマリアで日本に何が出来るかは大きな検討課題であった。そうした中で、省内での相談の結果、まずは調査団をソマリア、そして隣国のケニアとエチオピアに派遣して、日本の人道支援のあり方について検討すべしということになった。 団長は野上審議官、そして経済協力局や医療関係者を含む JICA 関係者も参加し、私も団長を補佐する立場で同行した。ソマリアの首都モガディシュは、かつては白亜の建物が並ぶ美しい都であった由で、タンザニア大使館勤務時代にこの地を訪問した経験のあった野上団長は「アフリカ大陸で一番美味しいイタリアーレストランはモガディシュにあった」と懐述されていた。

調査団は先ず、ケニアを訪問し難民キャンプでの調査を行った後、その一部が赤十字国際委員会 ICRC が職員の交代や緊急物資の輸送のために使用していたものであり、ほぼ毎日運航されていた。われわれの乗ったチャーター便は、当初モガディシュ空港（南部空港と称され、かつては国際空港として機能していた）に着陸する予定であったが、この空港が国連関係の航空機により使用されて大変混雑していたため離陸後急遽、北部空港「こちらはまったく名ばかりの空港であり、モガディシュ郊外の砂浜を地均したものにすぎない）に着陸することとなった。着陸する空港が急遽変更となった事情は、その後国連ソマリアオペレーション（UNOSOM）の関係者から聞いて分かったのだが、航空機に乗っている時点では未だわれわれに伝わってこなかった。

いざ着陸してみると、予定していた UNOSOM 本部からの出迎えもなく、武装した集団がいるだけであり、いきなり自動小銃（AK-47）を向けられ、入国審査と称する小屋に連れて行かれた。私自身、自動小銃を向けられたのは初めての経験であったため、どのように対応してよいか分からなかった。しかし、中東平和の修羅場を見てきていた野上団長は落ち着いており、おもむろにダンヒルのタバコを吸い出したのである。すると、周りに居た武装集団がタバコをねだり出し、野上団長がタバコを分け与えると態度が一変。空港にいた ICRC 関係者をお願いして何とか無事にモガディシュ南部にある UNOSOM 本部に移動することが出来た。その移動に際しても、モガディシュ北部と南部の境界線であるグリーンラインを越える際には、人質交換のようなやりとりを経験した。私はタバコを吸わないのだが、この時だけは「タバコも役に立つ」ことを実感させられた。その後、半日をかけて UNOSOM やアメリカ軍関係者と意見交換をして、その日のうちにケニアのナイロビに戻るはずであったが、予定していた国連関係機関のフライトがキャンセルされたため、やむなくモガディシュに一泊することとなった。因みに、アメリカ軍関係者を訪問し、入り口で待っていた際、フル装備のアメリカ軍兵士が近くに寄ってきて、何かと思っていたら、「日本人か。自分は沖縄に長く滞在していたが、日本には大変良い思い出がある。懐かしくてつい声をかけてしまった」と述べていた。日本に滞在したアメリカ軍の関係者が日本に良い思い出を持って世界で活躍していることは日本にとって大変なアセットである。

モガディシュでは、200 ドル弱を支払って国連児童基金（UNICEF）の関係者が定宿にしていたコンパウンドに急遽泊めてもらい、食事も提供してもらった。缶詰のスープに簡単な肉と野菜、そしてパン。ワインもグラス一杯飲んだ記憶がある。

その夜、UNICEF が所有していた四輪駆動車を盗みに来た武装集団と UNICEF 側の警備との間で銃撃戦が展開させられた。野上団長はすぐに気が付いた由だが、私は最初全く気付かず、銃撃戦の最後の

方になって窓越しに見ると、真っ暗な中で自動小銃が発射される度に光の筋が飛び交っているのが見えたので、「これは危ない」と思って慌ててバスタブの中に身を潜めた。これは出発前に東京で読んだアメリカ国務省発行の安全ガイドンスの冊子の中で「家の中では、何層にもわたってガードされるバスタブの中が一番安全」との記述があったことを思い出したからであった。本当にそのような対処方法で良かったのかどうかは今も分からないが、幸いそれ以上大事とはならず、無事朝を迎えることが出来た。

翌日は空港に向かう道筋を見て回ったが、モガディシュ市内は社会秩序もインフラもすべて破壊尽くされていた。地中に埋められていた電話線さえも掘り起こされて何かに利用されている由で、電話網もすべて破壊尽くされていた。当時、携帯電話は未だ普及していなかったため、連絡はすべて携帯無線に頼らざるを得ないものの、これもチャンネル数に限りがあり、回線の混雑や混線が生じるので、連絡を取り合うだけでも相当な労力を要する。そのような状況なので、その日のフライトの予定は分からなかったが、ともかく空港で待っていれば何とかなるであろうと期待して空港で待つこと約三時間、何とか座席を確保して無事にナイロビに戻ることが出来た。

外務省やJICAの多くの先輩や同僚が厳しい勤務環境の中、危険が伴う任務に従事されてきている中で、私のモガディシュでの一泊などは取るに足らない経験であろうが、それでも私にとっては大変貴重な体験であった。結局、ソマリアに対する人道支援については国際機関を通じた支援を強化するぐらいしか出来なかったし、また、現在の日本に置き換えてみてもわれわれのとり得る選択肢は少ないのではないかと思う。しかし、このソマリアへの調査団の派遣を通じて、顔の見える対アフリカ支援を進めるには何をすべきかという議論が外務省の中で活発になったことは事実であり、私個人にとっても考えさせられることが多かった。

その後、冒頭にも述べたように、1993年10月には千人以上の参加者を得て、第一回TICADを何とか成功させることが出来たし、それ以降TICADがプロセスとして脈々と続いているのは大変喜ばしい限りである。また、カンボジアに続く本格的な国連平和維持活動への参加として、1993年5月に国連モザンビーク活動(ONUMOZ)に輸送調整部隊を派遣することも出来た。こうした日本の国際貢献に外務省員の一人として些かなりとも貢献できたとすれば大変名誉なことである。

それにしても、ソマリアという国の名前を聞く度に、モガディシュで出会ったアメリカ軍の兵上が今頃どこでどうしているのかと気になっている。これも外交官としての「一期一会」であろう。